

# 源流をたどる、流域を俯瞰する

鳥瞰図作家

村松 昭

むらまつ あきら



鳥瞰図とは、鳥が上空から見下ろしたように、建物や地形を立体的に描く地図の技法だ。古くから名所図会や寺社案内など、観光の絵図などで親しまれてきた。例えば大正から昭和にかけて活躍した吉田初三郎という絵師の作品は、全国各地の旅行パンフレットに掲載され、当時の観光ブームを牽引した。現在も日本には数人の鳥瞰図絵師がいるが、制作に時間も手間もかかるので、専業で立つのはなかなか大変だ。

私はもともとデザインの仕事をしていたが、東京・調布市の深大寺付近に引っ越した際、周辺案内の絵地図をつくったのをきっかけとして、地図制作

の仕事が徐々に舞い込むようになった。妻の郷里である新潟の柏崎など、縁がある地域の地図を制作するうち、馴染みある東京の奥多摩の山や沢の自然を鳥瞰図で描いてみたくなった。

今のように「源流から〇キロ」といった標識もなく、基礎的な地理情報が十分ではない時代だった。源流を探しに、徒歩で何日もかけて少しずつ実測をしながら、コツコツと描いていった。

そうして年を重ねるうち、生まれ育った多摩川へと描くエリアが広がっていった。実際に足を使って調べると、川辺に生息する動植物などの情報が地元の方々から集まってくる。様々な生き物を地図の中

に描いていくと、身近で豊かな川辺の自然が見えてくる。そうした情報を鳥瞰図に盛り込み、見ても読んでも楽しい地図にすることを目指した。一方で、例えばカタクリなどの山野草が群生していると描きこむと盗掘されたりすることもあり、思わぬクレームにつながったりもする。植生保護のために、情報の掲載の仕方では慎重になったりもした。

私は小さい頃から多摩川の付近で暮らしてきたので、昔から川に親しみがあつた。子どもの頃はよく多摩川で泳いでいたし、川底の至るところからコポコポと水が湧いているのに驚くこともあつた。近隣

に工場や住宅が増えれば水質が落ち、下水整備によって改善するなど、川を描き続けると様々な環境変化や地域の変遷を実感する。

こうしてつくった多摩川の絵地図を契機として、子ども向けの川の鳥瞰図の絵本シリーズが生まれた。鳥瞰図にはまった子どもは、たくさんさんの情報を丹念に読み込んでくれる。子どもだけでなく、様々な年齢層の方から川辺での体験や思い出が寄せられることもある。「川は行政区分の境目になったり、跨ったりもするので、流域全体を俯瞰する視点があつたが、絵本を読んで、川の上流、源流に思いが至った」といった感想もあつた。

多摩川、筑後川、千

曲川・信濃川、吉野川、

石狩川、淀川、荒川・隅

田川、北上川——息の

長いシリーズとして全国

の川を描いてきた。川を

めぐる人々の営みや自然

を、流域全体を俯瞰する

視点をもって描き続け、

これからも多くの人に楽

しんでもらいたい。



「日本の川」シリーズ 発行：偕成社

## 時の調べ Essay

### 略歴

1940年千葉県生まれ。桑沢デザイン研究所などで、デザイン、油絵、リトグラフを学ぶ。1970年頃から、独学で山や川の鳥瞰図を作り始める。作品は、絵本に『たまがわ』『ちくまがわ』『ちくまがわ・しなのがわ』『よしのがわ』『よどがわ』『いしがりがわ』『あらかわ・すみだがわ』『きたかみがわ』『野川散策絵巻』『四万十川散策絵図』『山形・最上川流域散策絵図』『秩父・奥武蔵散策絵図』など、50点以上。東京都府中市在住。